

地域学の一例としての「尾道学」の構築と実践

林, 良司

尾道学研究会前事務局 : 事務局長 | 尾道市史編さん委員会事務局 : 専門嘱託員

<https://doi.org/10.15017/1955366>

出版情報 : 総合文化学論輯. 7, pp.9-38, 2017-11-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン :

権利関係 :

地域学の一例としての「尾道学」の構築と実践

林 良司

この論文は、広島県尾道市を中心として行われている地域学「尾道学」の試みについて、具体的実践例を交えながら、尾道といういわば生き生きと活動して歴史を刻んでいる地域を考察の対象とすることの意味と、その方法と、将来への展開の見通しについて述べるものである。

I 尾道学とは？～地域学概説と尾道学研究会の概要

何々学などと言うと、考古学や民俗学などのような、学問の一ジャンルと解釈されるが、特定の地域を冠した地域学にあっては、読んで字の如くでその地域を対象とした、地域を学ぶための学問という事になる。

しかし地域と一口に言っても広い。ここでの地域は自分達の住んでいる地域、ここで採り上げる「尾道学」では、合併した所も含めての新尾道市域を対象範囲としている。地域、というより地元と言った方が馴染み易いだろうか。地域学という言い方の他に「地元学」と呼んでいる例もある。

我々が暮らす地元の歴史や文化、風土といったものを、知る・学ぶ、知り得たもの、学んだものから、単に地域理解だけにとどまらず、今後の「まちづくり」や「まちおこし」に繋がるヒント、種（タネ）を得ようとする試みが地域学であると、筆者はそのように解釈して実践し続けている。「地域学」には確固とした定義は持たない。実施主体によってまなざしはそれぞれ異なり、およその分類をすると以下の通りである。

地域学の事例① 大学の学術研究としての、或は地域貢献としての地域学。

地域学の事例② 生涯学習の機会としての地域学（行政機関における地域学に多い）。

地域学の事例③ まちづくり・まちおこしに繋げる事を主眼に置いての地域学。

その他、民間のNPO団体やサークル活動レベルでの地域学と実に多様である。

尾道学にあつては、学術的なまなざし（調査研究）＋市民の生涯学習・地域学習機会＋その成果によっては地域活性化や観光振興にも結び付くといった複合的なものになっている。

参考までに、全国の地域学を概観している山形県生涯学習センター発「山形学」のホームページでは、次のように地域学について述べられている。

(<http://www.gakushubunka.jp/yugakukan/chiikigaku/>、2017年10月23日検索最新)

「山形学」や「長崎学」、「横浜学」など＜地域学＞と呼ばれる活動が全国各地で盛んになっています。ここでいう＜地域学＞とは、たとえば「東南アジアの地域研究」などといった場合の、特定地域の総合的・学際的研究としてのエリア・スタディといわれる純学問的なものとは異なり、主に＜生涯学習＞の分野で実践されているところが特徴であります。つまり、ここでいうところの＜地域学＞とは、地域の自然、人、事象などを学ぶことによって、個々人が郷土観を確立し、ひいては地域活性化や地域づくりへの動機づけを図っていかうとするものであります。

また、「生涯学習としての地域学」はその地域の住民を主要な担い手として、都道府県や市町村などの行政（企画担当部門から教育委員会まで幅広い行政部門）、大学等高等教育機関、NPOなどの市民団体から趣味のグループまで、多様な実施主体によって企画されおり、それぞれの地域学は独自の目的や方法を持ち、様々な活動を展開しています。

例えば、地域に関する学習機会の総称や一連の講座事業の名称としての＜地域学＞、地域を科学的に把握しようとする学問研究としての＜地域学＞、地域振興・地域文化振興を指向する地域づくりや社会参加活動としての＜地域学＞など多様であります。

これらを一つの定義で括ることは難しいし、また括るべきでもないと考えられます。＜地域学＞は多様かつ多彩な“学び”の活動であり、現実的な“可能性”そのものであります。」

すなわち上記のように「地域の自然、人、事象などを学ぶことによって、個々人が郷土観を確立し、ひいては地域活性化や地域づくりへの動機づけを図っていかうとするもの」...更に多様なまなざしの地域学を、「一つの定義で括ることは難しいし、また括るべきでもないと考えられます。地域学は多様かつ多彩な“学び”の活動であり、現実的な“可能性”そのものであります」と紹介されているが、「現実的な可能性」こそが、まちづくり・まちおこし、地域を元気にする可能性ではないかと筆者は捉えている。

民間主導の地域学の一例が、尾道における「尾道学」になるが、実施主体となる尾道学研究会の経過を辿ってみる。



写真(1) 尾道大学教職員と民間有志による尾道学構築に向けての懇談会を報じる地元紙。

(山陽日日新聞 平成17年5月31日付1面)

地域を知る・学ぶ・考える、をテーマとする尾道学研究会は、今から12年前の平成17(2005)年の11月に立ち上がり、一昨年の秋に10年の節目を迎え、今年で12年目に入る。

発足当初は一般市民と尾道大学(現・尾道市立大学)の教員による10数名の有志が集まった会だが、現在の会員数は60名弱。市民はもとより、市外、県外の方も含め、年齢層は20代の学生から、80代の御長老さんまで、身分や立場も十人十色で、様々な層の方が参会されている。市外・県外の方は尾道出身者やゆかりのある方、尾道をもっと知りたい、学びたいという尾道ファンの方々が多い。

会の特徴としては、会員の中でも中心的な位置に居られる方にあつては、それぞれ得意分野をお持ちの方が多く、古文書解読をはじめとして、その持っている力を尾道学において発揮されている。また、資料の発掘、持寄りなどにおいて、会員の有無を問わず、多くの市民の方々の参加と協力を得て、今日の尾道学研究会が成り立っていると思う。一つ何かに取り組む毎に、尾道学の輪が大きく広がって行くという状態であった。

具体的な活動内容としては、定期的な例会やフィールドワークを軸に、「尾道学ミュージ

アム」と銘打った尾道学企画展の開催（不定期）、尾道に関する古い資料の収集整理・調査研究・保存・活用の「尾道学アーカイブス」の三本柱で、この内のアーカイブ、収集と記録保存の面では、筆者が席を置く新たな「尾道市史」の編さんにおいても大いに還元されるものとして、とりわけ重きが置かれるところとなる。



写真(2) 左…貸しギャラリーを利用した「尾道学ミュージアム」の一コマ。地元の祭りの古写真展に実際に担がれる神輿一基を登場させた。

写真(3) 右…展示会場へ市民からの資料の持寄り。

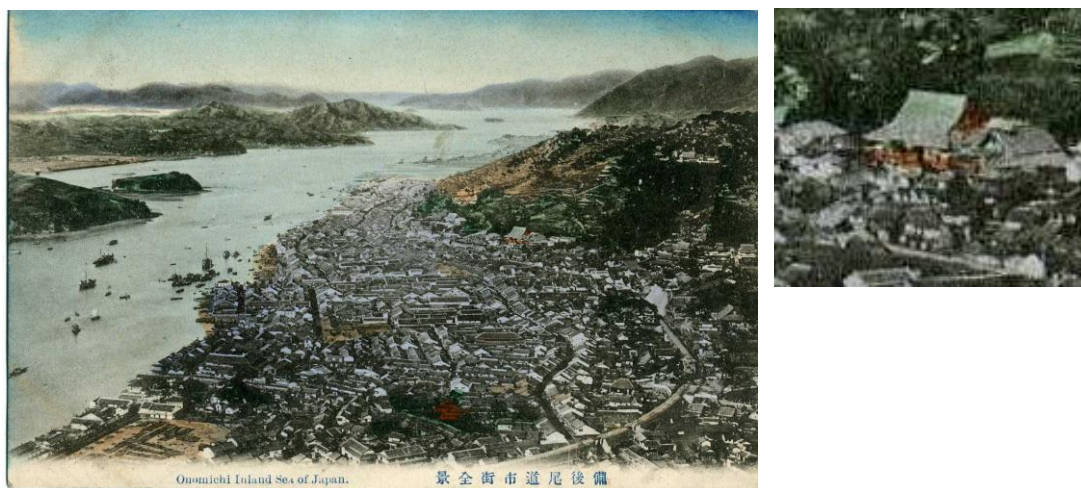
そうした掘り起しの作業も尾道学最大の特色である。尾道の歴史・文化の一通りは、寺社を軸に既に周知されているところであるが、尾道学がアプローチする対象は、そうした既に明るみになっているものではなく、余り人々の目が向いていないような埋もれた層の中から、これは面白いのではないかというものを掘り出し、綺麗に磨き上げて（調査・検証の作業に該当）、それを経て再発信する営みといえる。

その取組みの内から特徴的且つ大きなものを幾つかピックアップし、具体的なところを概観してみたい。

II 実践例その一 「尾道セピア色の記憶」 ～ 写真絵葉書で甦るありし日の風景

観光地のお土産で昔はよく見かけたものの一つに「絵葉書」がある。尾道も古くからの観光名所であるだけに、尾道絵葉書も豊富に出回っていた。

絵葉書の歴史を覗いてみると、明治時代、横浜などで外国人向けに出されたのが最初で、当時は当然モノクロ写真となるが、これに職人が手作業で彩色を加えた、「手彩色（てさいしき）」と呼ばれる絵葉書が明治期のものの特徴であった。尾道の絵葉書にも、最古級の絵葉書である幾つかの手彩色が見られる。



写真(4) 備後尾道市街全景 写真絵葉書(手彩色) 明治後期 尾道学研究会蔵

拡大写真は大宝山(千光寺山)南麓に位置する天寧寺本堂。

写真(4)は、浄土寺山(じょうどじやま・正式には瑠璃山(るりさん))辺りから尾道旧市街を見下ろす一枚。千光寺山(せんこうじやま・正式には大宝山(たいほうさん))の麓に位置する寺堂は位置的に東土堂町(ひがしつちどうちょう)の天寧寺(てんねいじ・曹洞宗)だが、拡大してよくよく見ると、そのお堂が赤く塗られている事が判る。実際には天寧寺の本堂は今も昔も赤くはない。赤いお堂といえ、その山の中腹に位置する千光寺(真言宗)であり、「赤堂(あかどう)とも称される。その赤堂千光寺と取り違え、麓の天寧寺の方を誤って赤く塗ってしまったのではないかと想像される一枚となる。

こうした手彩色の尾道絵葉書は、およそ明治後期の頃に作られたと見ているが、ビジュアルで尾道を迎える最古級の資料だといえよう。

歴史資料と言うと、古文書や或は考古学で扱う出土品などが筆頭に挙げられるところだが、近代以降にあっては、こうした「古写真」というものも有益な歴史資料として、取り扱われるべきものがある。

古文書などは解読する技能が必要で素人は容易に立ち入れないが、こうした写真や地図

といったビジュアル資料は一目瞭然で誰でも気軽に接し、何より楽しめるという強みがある。NHKの人気番組「ブラタモリ」でも、古地図や古写真が多用され、目を惹くところが大きい。

そうした古い時代の写真絵葉書を、尾道学立ち上げから数カ月経過という時期に展示会で披露した。(2006年4月2日～9日、まちかど尾道学ミュージアム002、天野安治コレクション×はがきびと)。

本会会長である天野安治が、切手収集などの郵便趣味の「郵趣(ゆうしゅ)」の世界で第一人者であり、貴重な郵便資料のコレクションを有しておられた事に因む、手前みその企画だったが、尾道学だけに尾道に関する郵便資料も当然必要として、一角に、明治・大正・昭和の昔の尾道風景を切り取ったこうした写真絵葉書を展示した。

当該展示は極小さなスポットコーナーに過ぎなかったが、懐かしむ年配の方から、自分たちの知らない昔の尾道が新鮮に写る若い人まで、市民を中心にこれが予想以上の反響を見て、中には尾道絵葉書の持寄りも見られるなど、新聞報道によって市外からわざわざ観に来られる等の盛り上がりを見た。

その予想外の反響・展開を目の当たりにし、これは本格的に発掘・収集していく必要があると、天野会長の監修の下に、尾道絵葉書を掘り起こす「尾道絵葉書発掘プロジェクト」を立ち上げた。当初は一過性であるはずだった企画展の終了後も継続して発掘・収集を続け、市民の方はもとより、市外・県外の方、また、コレクターの方などから、数百枚にも及ぶ尾道の古い絵葉書が持ち寄られるに至った(写真5)。

この持ち寄られた大量の尾道絵葉書を整理分類し、次の段階で、時代や写っている事象の特定作業を進めた。特定作業には、往時の尾道風景をよく記憶されている古老の方々、町の長老さん方にお集まり頂き、また、古地図や各種の資料も引用しながら、一枚一枚時間をかけて調べて行った(写真6)。

中間報告会も数回実施し一枚ずつ投影して、皆さんと一緒にワイワイガヤガヤと意見・情報を交換した。単純に今では見ることの出来ない尾道風景を、タイムスリップする感覚で楽しむ機会としても好評だった。



写真 (5) 左…持ち寄られた尾道絵葉書について説明する天野会長 (左)。



写真 (6) 右…年代や被写体の特定作業には、往時の尾道風景を記憶される古老の方々も参加した。

発掘収集から整理分類、調査研究を経て、その一連の成果を形としてまとめた資料集・写真集の制作・出版へと結実していった。『尾道…セピア色の記憶』（天野安治監修・林良司編、尾道学研究会、2009年1月刊）と題した資料集・写真集がそれである。

本編に続いてリリースした『今昔散策ガイドブック』（林良司編、尾道学研究会、2009年3月刊）版は、大林映画（大林宣彦監督の尾道新旧三部作）のロケ地めぐりの感覚で、セピア色に染まるありし日の尾道風景を探して街を散策し、撮影地点を見つけ、その位置に立って今昔対比を楽しんでもらおうという趣向を試みた（写真7・8）。

制作段階で筆者を含めて何人かのメンバーで撮影地点を探して回り、ほぼ同じ構図で写真を撮って行く作業を重ねたが、これも大変楽しい作業だった。趣向的にはまさにNHKの人気番組「ブラタモリ」的なところもあり、ありきたりではない尾道観光を楽しみたい方々にも受ける成果品となった。

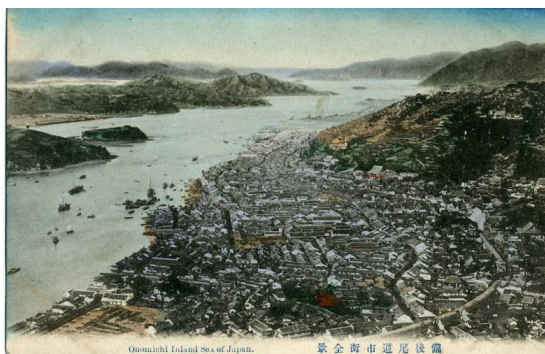


写真 (7) 左…瑠璃山（浄土寺山）からの市街眺望の今昔対比（明治後期の風景）。

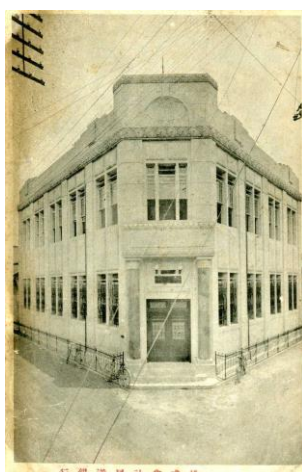


写真 (8) 右…瑠璃山（浄土寺山）からの市街眺望の今昔対比（平成の風景）。

写真絵葉書には、観光絵葉書と共に記念絵葉書というジャンルも見られる(写真9・10)。例えば小学校の落成記念、学校関連では運動会や水泳大会といった行事を記録するもの等がそれである。そうした内的な記念絵葉書は関係者に配布される為に制作されたもので、今でいう記念写真に当たる。当時、特に戦前において写真は大変高価なものであり、今日のように気軽に撮れるものではない。そこをフォローしたのが写真絵葉書だった。個人で撮られたものになると家族写真などプライベートな風景に終始するが、こうした写真絵葉書はオフィシャルなシーンを記録し、また、観光目的のものにあつては当時の町の様子を記録する事になり、小さな写真絵葉書だが軽視できない値打ちがあり、歴史資料として扱えるものになる。



写真(9) 広島県立尾道高等女学校秋季運動會記念繪葉書より 昭和5年 尾道学研究会蔵

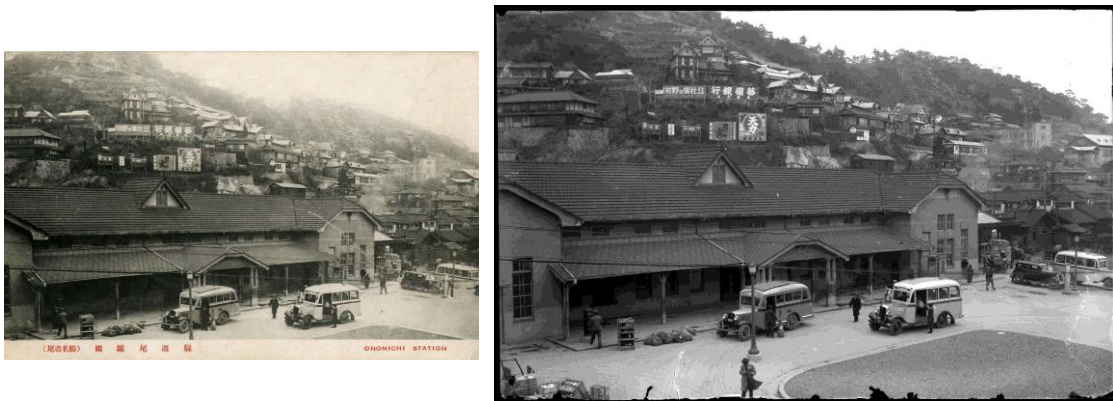


写真(10) 株式会社尾道銀行開業記念繪葉書より 大正11年頃 尾道学研究会蔵

尾道絵葉書発掘の取組みは、再発見と再発信から、収集整理・調査、そして編集出版で一応の結実を見た訳だが、その後も更なる展開を見せた。それが絵葉書の原板となる写真の発掘である（写真11）。



写真（11）ガラス乾板発掘を報じる地元紙（山陽日日新聞 平成21年10月15日付1面）



写真（12）左…（尾道名勝）国鉄尾道駅 写真絵葉書、戦前 尾道学研究会蔵

写真（13）右…（尾道名勝）国鉄尾道駅のガラス乾板での原板写真

尾道絵葉書を発行していた大半は地元の書店で、その内の一つ、土堂海岸通りに存在した盛文館（せいぶんかん）書店最後の経営者である射場昭人（いば・あきと）氏から、当時同書店で発行していた絵葉書のストックと、原板写真が残っているので、尾道学で保存・活用して欲しいとお寄せ頂いた。そこにはフィルムに混じってガラスに焼き付けた「ガラス乾板」と呼ばれるものも確認され驚かされた。しかしガラス乾板などどうやって現像するのか思案の最初であったが、幸いにも絵葉書発掘に参加したメンバー中に、こうした方面（デジタル技術）に精通した者がいた事から、専門の業者等に出すことなく、自前でデジタル現像を試みる事ができた（写真 12・13）。

「鉦脈にぶち当たったような展開」とそれを報じた新聞で表現したが、まさに予想だにしない当たりを更に得る取組みともなった。

この成果を受けて、前作の資料集を出して以降に集まった絵葉書もまとめる形で、『尾道…セピア色の記憶』第二集（天野安治監修・林良司編、尾道学研究会・啓文社、2012年3月刊）発行へと至った。この時には附録として、デジタル現像した内から尾道駅の写真を絵葉書化した一枚を封入した。

写真絵葉書に始まる古写真のジャンルは、皆さんからの関心度が高く、多様な尾道学の中でも最上位に来るジャンルであり、活動の中心、屋台骨とも言えるものにまで昇華したと総括する事ができる。

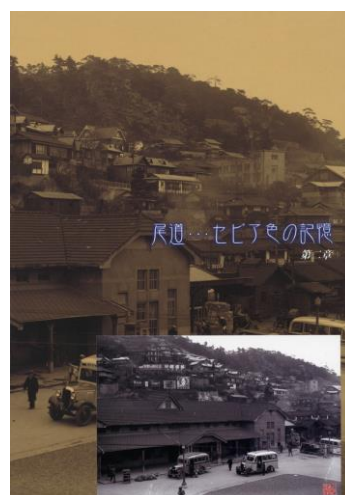
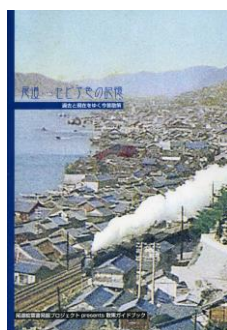
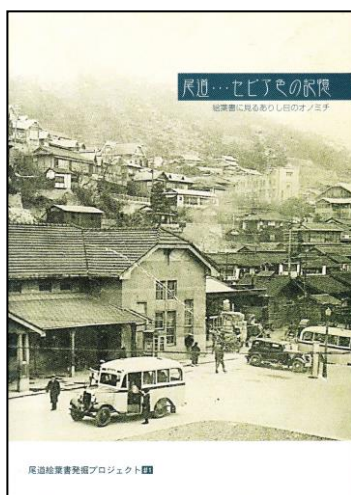


写真 (14) 左…『尾道…セピア色の記憶—絵葉書に見るありし日のオノミチー』2009年

写真 (15) 中…『尾道…セピア色の記憶—過去と現在をゆく今昔散策—』2009年

写真 (16) 右…『尾道…セピア色の記憶—第二章—』2013年

III 実践例その二 「タイムスリップ・レール・オノテツ」 ～消えた尾道鉄道の記憶～

尾道から出雲へ向けての中国横断鉄道...まさに当時の中国横断自動車道尾道松江線（通称・中国やまなみ街道）とも言える構想のもとに走り出した「オノテツ」こと尾道鉄道—明治 45（1912）年 5 月、尾道・御調の沿線町村から 255 名の発起人が集い、大正 15（1926）年 4 月に、現在のイオン尾道店南側のマンションが建っている辺りにあった西尾道駅から御調の市、国道 184 号線沿いの中国バス営業所の位置までの区間が開通し、その後、昭和 8（1933）年に山陽本線尾道駅に接続した私鉄電車であった。



写真（17）栗原町と美ノ郷町をまたぐ仙入峠^{せんに入}をゆく尾道鉄道 戦後 尾道学研究会蔵

尾道と御調を結ぶ南北の幹線交通路として機能した尾道鉄道であったが、時代は移り変わり、経済性・安全性などの理由から乗客は次第にバスの方へ流れ、これにモーターレーションの進展も相まって、昭和 39（1964）年の 7 月いっぱい廃線の時を迎える。この年は、高速鉄道としての東海道新幹線が開通した年でもあり、尾道鉄道の消失は、スローな時代の終わりを象徴しているかのようで、その時代にオノテツと接した人間ではないが、感慨に耽るものがそこにある。

絵葉書に続いて尾道学で盛り上がったのが、この尾道鉄道を取り上げた時だった（写真 18、2008 年 11 月 29 日～12 月 24 日、まちかど尾道学ミュージアム 009 タイムスリップ・レール・オノテツ）。このオノテツ企画では一ヶ月程度の会期で 4 千人という最高記録となった入場者数のみならず、会期中に貴重なオノテツの資料（遺品）が持寄せられた事も大きな収穫となった。

オノテツの本社倉庫から、廃棄処分されるところを譲り受けたという品々や、切符コレ

クターの方からは、通常は残る事のない切符類がまとまって提供されるなど、新たにガラスケースを用意して追加展示するなど、嬉しい悲鳴が上がった（写真 19）。



写真（18）左…尾道鉄道の企画展チラシ。

写真（19）右…会場へ寄せられた尾道鉄道の遺品群。

展示会は年末時期の開催であったが、そうした反響を受けて急遽会期を延長し、お正月も特別開館して帰省された方々にも楽しんでいただいた。

展示図録のようなものが欲しい、出さないのか？という声や問い合わせが開催中、そして終了後しばらく経過してから後も続いた為、絵葉書の流れに倣って、この掘り起しと資料収集、企画展示での成果をまとめた図録兼資料集として、『タイム・スリップ・レール・オノテツ・オノテツ・データファイル』（前田六二監修・林良司編、尾道学研究会、2011年3月刊）という一冊にまとめた。

こちらは市民や観光客のみならず、鉄道ファンからも着目して頂き、絵葉書本を超えて、尾道学の出版物ではトップ・セールスを叩き出す売れ行きを見せる事になった。

我々のオノテツ発掘は、そうした鉄道ブームに乗った訳ではなく、元運転士で後にオノテツを引き継いだ中国バスの役員もされた前田六二（むつじ）氏（故人）が会員の内におられ、ご存命の内に記録を取っておこう、その為に消えたオノテツの勇姿を再発見してもらおうと企画したものだったが、これも思わぬ収穫が後から付いて来た事例になった。

残念ながら前田さんにはその完成を見届けて頂けなかったが、これ一冊でオノテツの1

から 10 までが分かるというコンセプト通り、かなり充実した中身に仕上がったと満足している。

本の装丁がグリーン一色と独特なものになっているが、これは尾道鉄道の車体の中心的カラーに因むもので、装丁を手掛けてくれたのは、尾道大学在学中に尾道学研究会に所属し、活発的に動いてくれていた美術学科デザインコースの卒業生（坂本実央（みお）氏）の力作になる。この前後の時期には、その学生のみならず、複数の尾道大学生が尾道学に興味関心を持って多く参加してくれた。

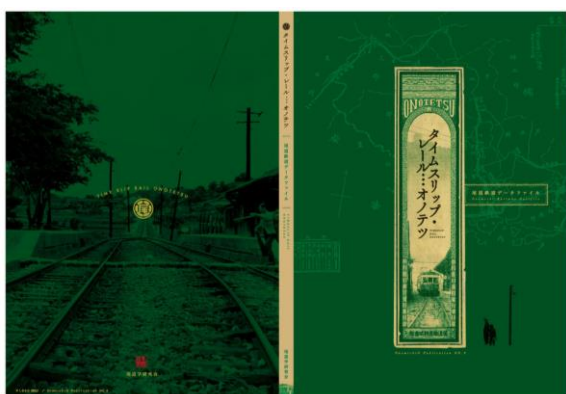


写真 (20) グリーンを基調とした『タイムスリップ・レール・オノテツ』の表紙装丁。

IV 実践例その三 「甦る茶園文化」 ～尾道文化を花開かせた舞台装置～

「茶園」という文字は「ちゃえん」と読んで、それは茶畑を意味するものと誰しもが思うだろう。しかし尾道にあってはこれが茶畑ではなく、「さえん」と読んで、別荘及びそこにしつらえられた庭園を意味するものとして使われてきた。

「茶園」の語源については何も伝わっていないが、茶園の内には決まって茶室が設けられており、庭園と共に茶園を構成する二大要素的なものが見られるところから、また、尾道は茶の湯の歴史・文化も色濃いつころでもあり、茶園の茶は茶室と茶の湯、園は庭園であり、その二つを掛け合わせた造語ではないかというのが自説である。

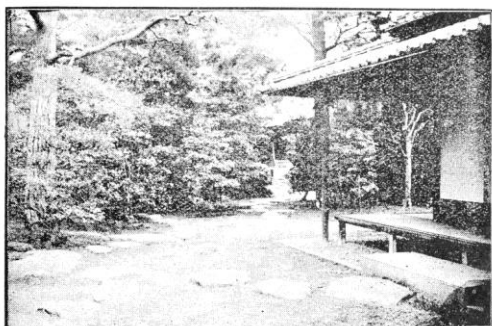
茶園の語は文豪・志賀直哉の作品中にも出てくる。直哉が尾道滞在中に創作した全編尾道を舞台にした短編『児（こ）を盗む話』の中で、「上の茶園(別荘の事)で面白い事があるんだぜ。見せて貰おう。それから帰ればいい。先刻三味線を弾いてたろう？」(『志賀直哉

全集』第2巻、岩波書店、1973年）と、千光寺山に見られた茶園が作品中に登場しており、直哉も尾道滞在中に「茶園」の存在（呼称）を知り得たようだ。

今日ではすっかり廃れてしまい、茶園に通じる方は少なくなっている。江戸時代以降、明治・大正・昭和の戦前辺りにかけて、主に尾道商人が見晴らしの良い山手斜面地や、海辺に面した場所に構えた風流な別荘を尾道では何故か茶園と称して、競って各所に構えられた（写真21）。

代表的な茶園で、用途を変えて今も活用されているものでは、市の管理で休日に開放されている久保本通り東端に位置する、橋本家の茶園「爽籟軒（そうらいけん）」、宿泊施設として開かれている東土堂山手の島居（しまずい）家の茶園、通称・出雲屋敷などがある。

また、その島居茶園に隣接する元・新道アパートの区画も元は茶園で、千光寺新道（しんみち）沿いに城を思わせるような立派な石垣が見られるが、天野春吉（はるきち）氏の茶園から、この石垣を「天春（てんはる）の石垣」と通称している。



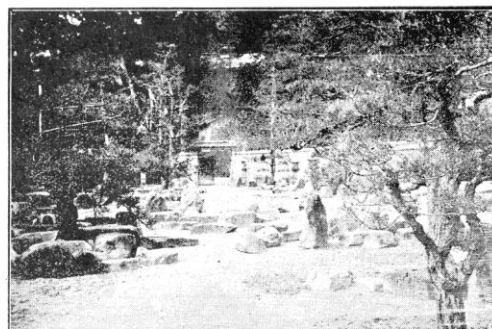
(六其) 莊別君衛兵吉本橋



(五其) 莊別君衛兵吉本橋



(二其) 莊別君助貞原柏



(一其) 莊別君助貞原柏

写真（21）大正4年発行『尾道案内』（吉田松太郎編著、中国実業遊覧案内社）のグラビアに掲載された市内の主な茶園より。

尾道学で茶園にアプローチした最初は、千光寺山の東斜面、長江の山城戸（やまきど）に所在した「挹翠園（ゆうすいえん）」と、向東町（むかいひがしちょう）沖合に浮かぶ現在は無人島となっている加島（かしま）にあった「賀島園（かしまえん）」への調査からだった。何れも江戸時代に築かれた古い茶園になる。

それぞれの茶園跡を、考古学の遺跡と同じ観点で調査したもので、この茶園発掘プロジェクトは、研究会メンバーで考古学者である現在・福山市立大学准教授の八幡浩二氏を団長に立てて臨んだ。

長江の「挹翠園」は、熊谷（くまがい）氏という江戸時代の割庄屋が築いた茶園で、こちらには頼山陽（らいさんよう）や田能村竹田（たのむらちくでん）という著名な文人墨客が訪れており、頼山陽はその時の情景を漢詩にしたためてもいる。（頼山陽「遊挹翠園記（ゆうゆうすいえんき）」）

現在その跡地に痕跡を探してみると、巨岩を用いた滝の跡と庭園の一部、古井戸が民家の敷地内に確認され、そこから少し離れた位置にある竹林の中において、窯跡の痕跡が発見されている。

窯の推定地すぐ下の位置からは、失敗作を投棄したと思われる素焼きの土器片が大量に採集されており、分類すると煎茶器、酒器、花器類になり、杯状のものがとりわけ多く目につく。中には完全な形で残っていたものもある（写真 22・23）。

茶園の附属施設として窯を設け、そこでこうした器を独自に焼いて、恐らくは訪れた文人墨客と一緒に絵付けなどを楽しんでいたのではないだろうかと思われたい。こうした独自生産の内輪的な焼物を「お庭焼」と称するようだが、今の所お庭焼が見られた茶園の確認は「挹翠園」が唯一で目を惹くところである。



写真（22）左…窯跡推定地付近から採集された素焼きの土器片（長江中町内会蔵）

写真（23）右…釉薬の施された採集品（尾道市教育委員会蔵）

このように茶園では、単に別荘というだけでなく、文人墨客のみならず広くお客を招き入れ、お茶をやったり、お酒を酌み交わしたり、或は風流・風雅な場所で絵を描いたり詩を詠んだり、文芸にも興じていた光景が浮かび上がる。言うなれば茶園は文化サロンの場としても機能していた訳で、尾道が文化都市と称される源流の中に、茶園で繰り広げられた文化活動もその一つとしてあるように思う。

今一つの「賀島園」は、泉屋（いずみや）を屋号とする商人・松本氏によって加島に築かれた茶園で、当時は住民が居ない無人島の時代で、島全体が茶園のような様相を呈した。詳しい経過は分からないが、広島藩主浅野家から何かしらの褒美（政治献金？）として加島を頂戴した松本氏が「賀島園」と名付け開いた。広島藩内の三名園の一つに数えられたというから、かなりの茶園であった事が想像されてくる。

こちらにも池の跡や石橋、石垣、石碑など、茶園時代の痕跡が点々と確認されているが、賀島園最大の資料は、尾道市立美術館に所蔵される「賀島園（かしまず）」で、茶園の様子を絵画で描き留めた非常に資料的価値の高いものだと見える（写真 24・25）。



写真 (24) 左…尾道市立美術館所蔵『賀島園』所収の「加島園全景図」

写真 (25) 右…尾道市立美術館所蔵『賀島園』所収の「加島園十景図」の内の一景

今日では大半の茶園が空き家になり、中には見捨てられて朽ち果て行く有様になっているものが多々ある。お屋敷だけに管理も大変であり、なかなかこれを維持しようというのは困難な現状だろう。そうした中で、空き家再生の取り組みの中でも尾道独特な茶園に着目されたNPO法人尾道空き家再生プロジェクトの主導により、尾道学研究会も参画して「尾道茶園文化研究会」が2015年より立ち上げられ、歴史的な側面に建築の視点も加わり、更には利活用へのまなざしも含めて、茶園の復権への地道な活動が進められている（写真 26）。



写真 (26) 尾道空き家再生プロジェクト発行による『尾道茶園案内帖』(2017年3月)より「尾道茶園案内MAP」

建築的な視点で茶園を少し覗いてみると、洋館付きのお屋敷も特徴として挙げられる。和風建築に洋館が合体したまさに和洋折衷の特異な建築様式は、「文化住宅」とも呼ばれる。この様式は尾道だけのものではなく、大正末から昭和初期にかけて、横浜辺りから始まって広く全国へ流行して行く当時の先端的な建築様式の一つだったようである。

宮崎駿のアニメ映画「となりのトトロ」(1988年4月16日公開)で、サツキとメイが引っ越した先の家がまさにその様式になっている。尾道にも駅裏の西山手の界隈を中心に、点々ところした和洋折衷の文化住宅様式が茶園の中に見受けられ、とりわけ西山手のエリアにあっては、趣のある景観を形成している(写真27)。

失われゆく茶園文化ではあるが、尾道文化の一つとして、今一度目を向け、磨いて今に再生できるものにあっては橋本茶園や島居茶園の如く、違った用途で現代に甦らせ、神戸の異人館のように、尾道独特の文化発信の資源にまで高める値打ちはあるように思う。

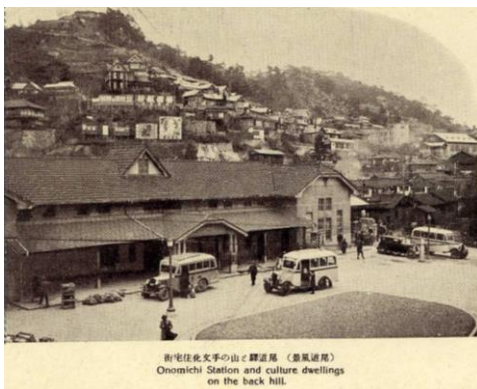


写真 (27) 尾道駅と西山手の洋館群

写真絵葉書(部分) 戦前 尾道学研究会蔵

V 実践例その四 「祇園さんと時宗常称寺」 ～139年ぶりの神と仏の再会劇～

尾道の夏を勇壮に彩る祇園さんの「三体神輿・三体廻し（さんたいみこし・さんたいまわし）」、今年（平成 29・2017 年）は 6 月 24 日の夜に行われたが、雨に打たれながらのまさしく勇ましい神輿を見せつけた。

祇園さんと言えば京都が本家的に有名であるが、尾道に見る祇園さんは、明治になって神仏分離が実施される以前、いわゆる神仏習合の時代にあつて、同じ町内に所在する常称寺（じょうしょうじ）という時宗のお寺の境内にあつた。

明治初年の神仏分離以後は、お寺を出て南の新開の内にある巖島神社の内に合祀される形で今に至っている。

以降プツリと途切れた祇園さんと常称寺の関係を今一度掘り起し、かつての記憶を呼び覚まそうと、お寺と神社の全面協力を得て、「祇園さんと時宗常称寺」と題した企画展示会を尾道学において実施した。平成 20（2008）年の夏の事である。（2008 年 7 月 4 日～20 日 まちかど尾道学ミュージアム 007 祇園さんと時宗常称寺）

常称寺には神仏習合時代の古文書が豊富に残されており、こちらの中から当時の祭りの様相を窺い知れる部分を抜き出し、古文書解読の担当者に訳してもらい、江戸時代の祇園祭の場景を浮かび上がらせた。

その他、お寺や神社に残る関連する資料を展示し、また、威勢の良かった時代の写真も豊富に残っていたことから（写真 28・29）、写真展も行うなど、色々な角度から尾道祇園祭の歴史やありし日の場景にクローズアップした。



写真 (28) 左…昭和 30 年代頃の三体神輿の勇姿 古写真資料 尾道学研究会蔵

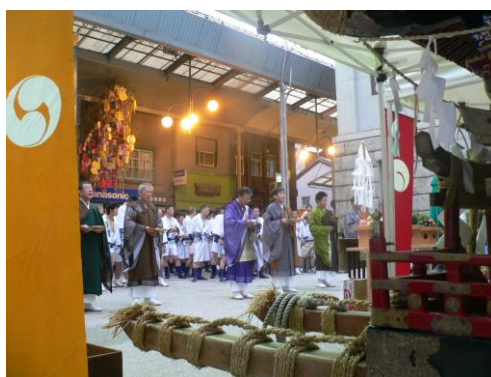
写真 (29) 右…「備後尾道祇園祭御幸略図」明治期の版画 久保亀山八幡宮蔵

展示だけでなく、更にインパクトのある、記念になるようなものが出来ないかと、お寺と神社双方、当時三体みこしを運営していた尾道青年会議所と協議・調整し、実際の祭りの中で両者の歴史を偲ぶ企画を実施することになった。それが 139 年ぶりの出来事になった「三体神輿の常称寺里帰り」であった（2008 年 7 月 12 日、写真 30）。

神社を出発した神輿が町内を練る前に、常称寺境内へ担ぎ入れられ、住職方の出迎えを受け、こちらで出発前の三体神輿を前に住職が神前読経を上げられるなどの、まさに神仏習合時代さながらの儀式が執り行われた。常称寺時代の祇園さんは、当然お寺から三体神輿が出発し、町内を練っていた訳で、まさに当時の姿を再現した形。

神仏分離から 139 年ぶりに、祇園の神様と常称寺の仏様（阿弥陀如来）が再会を果たされた形で、「139 ぶりの神と仏の再会劇」というストーリー性が大きく注目されて、新聞はもとより、ローカル枠ながらテレビにも取材していただいた。

この歴史的な再会劇は、歴史的な観点からも非常に意味のある、そして歴史の内に残り得る出来事ではなかったかと思う。また、両者の再会、コラボレーションは、この時だけの一過性のものに終わらなかった事も大きなポイントとなった。



写真（30）左…139年ぶりに常称寺へ担ぎ入れられた三体神輿 尾道三体みこし保存会提供

写真（31）右…御旅所に安置された三体神輿へ参詣する時宗尾道門中の僧侶。

里帰りの翌年には、それまで一夜限りの一夜祭りになっていたところに前夜祭を復興し、そこでは町の神輿の位置づけも持った三体神輿が、それぞれの神輿に対応する久保・長江・土堂の各町内へ帰還し、町衆の代表者（町内会長等）によって迎え入れられる儀式を執り行った。

尾道祇園祭は、旧暦の6月7日から14日に亘る一週間にも及ぶ一大祭りだった。それが担ぎ手不足や交通事情の変化等、時代の波で一時途絶えて以後、尾道青年会議所の手で昭和53（1978）年より復活を遂げたが、昔のように長期間お祭りを運営するのは無理として一日限りの祭りに規模縮小されていた。

一週間もあったという歴史を今に何とか打ち出そうと、前夜祭をお祭り前日ではなく、一週間前に設定した。ちょうど夜店が商店街に立ち賑わっているのとリンクして、商店街の一角にある広場へ三体神輿を担ぎ出し、そこを仮設の御旅所（おたびしょ）として安置し、それを前に町内代表者と一緒になってセレモニーや余興を執り行った。

そこでのメイン・イベントは、常称寺を筆頭とする時宗門中の寺院僧侶の方々のお詣りと神前法要で、この部分も神輿が安置される御旅所へ、常称寺住職が参詣するシーンが見られたという古文書の記録（寛政元年（1789）6月「常称寺祇園略由来」常称寺蔵 尾道市史編さん委員会事務局寄託）に基づいた再現であった（写真31）。また、御旅所となる広場の所在が土堂（つちどう）地区になるが、こちらも「尾道町の西端の土堂と申す所に御旅所を設けた」との古文書の記述（前掲の「常称寺祇園略由来」）を踏襲している。

この年から一週間前の前夜祭が復活し、今ではすっかり定着して例年の行事として親しまれている。

この前夜祭が復活した年の祭当日には、常称寺里帰りとは逆に、常称寺を主役とする時宗門中の住職一同が神社へ参向し、出発前の三体神輿を前に神前読経を捧げられた。神社で般若心経のお経を上げるわけで、今日では大変物珍しい光景に映るが、明治より前には普通に見られた光景である。

その後の展開では、前述の通り三体神輿が祇園社の神輿であると同時に、「町の神輿」でもあるという認識を呼び覚ますことも実行した。

昔からの尾道の町域を構成する久保・長江・土堂という3つの地区にそれぞれ神輿が対応し、東の久保が「一つ巴（ひとつどもえ）」と呼ばれるメインの神輿、中心部の長江が「二つ巴（ふたつどもえ）」と呼ばれる神輿、西の土堂が「三つ巴（みつどもえ）」と呼ばれる神輿となっている。そして担ぎ手もその昔はそれぞれの地区の者が担いでいた。

しかし青年会議所の復活以後は、その辺が見失われてしまっていたので、その部分を原点回帰させようと、担ぎ手もそれぞれの地区に対応するように戻した。

現在の担ぎ手は地区住民というより、各地区の神社で神輿を担ぐチームが参加されているが、久保の神輿は久保の神社に属する担ぎ手グループに担いでもらうというような形を

以後は取った。

この結果、土堂地区の三つ巴神輿はそのままでよかったが、久保と長江地区が神輿をチェンジする格好となった。本来の形に戻った時の前夜祭では、巴の交替式と銘打って、地区の代表者がハッピを脱いで交換し合うセレモニーも実施した。こちらも本来の形に戻って年数が経過し、定着を見ている。

こうして歴史を紐解いての原点回帰、復興が次々と試みられて行ったわけだが、その中でも一番の極めつけ、最もインパクトを放ったものが、神輿が海へ入った「神輿洗い」の復活だった（写真 32・33）。

これは神輿を海水で清める神事的な意味合いを持つもので、昔は三体廻しとセットの様に普通に行なわれていたようだが、ここ最近は安全面と神輿のダメージ防止の観点からしばらく取り止めになっていた。

青年会議所が復活させた時もこの部分が行われていたが、やはり安全第一で事勿れ主義的な感覚で祭運営をしていると、自ずとやらない方がいいという方向になり、しばらく見られない状況が続いた。そこに、これこそが祇園さん一番の見せ場ではないかと奮い立ち、担ぎ手有志も筆者の熱意に同調し、同調しかねる長老衆を無視して半ば強行的に決行させた。

寝耳に水の長老衆からは当然お叱りを頂戴する事にはなったけれども、観衆の中で昔を知る年配の方々からは、これぞ祇園さんの神輿だと拍手喝采を送って頂き、メディアの方でも長年途絶えていたものが再び復活を遂げたと大きく報じられる等、反響は大きく返ってきた。



写真 (32) 左…復活を果たした神輿洗い 2010 年の三体廻しにて 尾道三体みこし保存会提供

写真 (33) 右…昭和 30 年代に見られた神輿洗いの光景 古写真資料 尾道学研究会蔵

その他、祭に花を添えるものとしての新規企画としては、お宮のあるお膝元の久保小学校の子ども達の子供みこしでの参加と、神輿が出て行った後のお宮周辺を賑やかにする為の「祇園市（ぎおんいち）」がある。

子ども神輿の参加は、これまでは同じ地域でもまた別の久保亀山八幡神社の秋祭りで子ども会が実施主体となって参加を見ていたが、その子ども神輿をよく見ると屋根に付した紋が、お膝元の久保地区の神輿の紋所である一つ巴になっており、そこでこれは秋祭りよりも祇園さんに担ぎ出した方がいいのではないかと提案。また、その昔の祇園祭には、随分と立派な山車（だし）が神輿のお伴で各町内から繰り出していたようで、その山車の上では、京都さながらに子ども達がコンコンチキチンの「祇園囃子（ぎおんばやし）」を奏でていたとの記録があり、この部分も何とか甦らせることは出来ないかという所とも合致した。

山車やお囃子の復活には時間を要するが、子ども神輿であればすぐに対応可能という事で、三体神輿がバトルを繰り広げる会場まで練り進み、大人神輿が入る直前の前座として、子ども達に元気を振りまいてもらっている。いつの日にか、尾道祇園囃子を復活・再現出来ればと思う。

祇園市は、神輿が出た後はお宮周りが寂しくなるという声を受けたもので、それまでは町内がお世話されての福引や模擬店が数店出る程度であったが、こういった出店系のイベントに明るい方の参加・協力を得て、飲食から物販まで色んなジャンルの出店を市内外問わず広く募り、それを「祇園市」と称して参道周辺で大きく開催した。この祇園市というのも、祭礼の時には市が立つ賑わいだったという過去を偲ぶ一面もあった。

尾道祇園祭の再活性化で触れない訳には行かないのが、地元尾道大学の学生の参加・コラボレーション企画である。

一つが、御祭神の中の紅一点、櫛稲田姫（クシナダヒメ）の女神の肖像、御神像を美術学科で日本画を専攻する学生に描いてもらい、正式にお宮へ奉納し、その年の前夜祭には櫛稲田姫の神輿と一緒に飾られた。

今一つは三体神輿のミニチュアで、こちらは紙一枚から組み立てて作るペーパークラフトである。これも美術学科のデザインコースに在籍した学生の制作になる。

その昔の尾道祇園祭では、三体神輿を模した手のひらサイズのオモチャが祭土産として露店で売られ、それが後に尾道の郷土玩具の一つともなったが、祭が衰退し、作り手も絶えて以後は廃絶してしまっていた。

これも何とか復興できないかと考え、木製から紙製に変えて、自分で作る楽しみも加味したペーパークラフトで甦らせたもの。意匠的に当時の玩具よりかなり忠実なデザインになっており、なかなかのクオリティに我々も驚かされた。



写真 (34) 左…二つ巴神輿に奉納された櫛稲田姫の神像画と作者の宮本真弓さん

写真 (35) 右…ペーパークラフト化した三体神輿 (デザインコースに在籍した坂本実央さん作)

次いでここ最近見られる学生とのコラボでは、更にこの三体神輿のおモチャが進化を遂げ、木製パーツを組み立てて完成させる、より本格的で本来の郷土玩具により近いものが登場している (写真 36)。

こちらの新作は、ペーパークラフトの時と違って学生一人の個人プレーではなく、中心となる一人を軸に複数の学生が相集うグループによる成果品として上がったもので、皆で協力して、また、神社に関わる人々の手助けも得て数を用意し、一体 500 円で販売された (収益については学生達のグループの活動資金に充てられた)。

その新作玩具を用いた「三体神輿のトントン相撲」なるワークショップも学生主体で開かれた (写真 37)。昔の三体神輿玩具にシュロの毛が取り付けられており、机の上に置いてトントン叩くと、コトコトクルクルと動き出し、回り出す訳で、いわゆるトントン相撲の要領で、「けんかみこし」さながらに勝ち負けを競って遊んでいた场景を再現させたものになる。

このトントン神輿バトルをより発展させて、それぞれがマイ神輿を持ち寄り、バトルを繰り広げる大会を開催してはどうかと学生達に投げかけたが、これ一つ取ってもお祭りとは別に更なる展開の余地がありそうである。



写真 (36) 左…往時のように木製化した三体神輿玩具

写真 (37) 右…子ども達を対象とした三体神輿新玩具の組み立て&着色ワークショップの様子

VI 最近の動向から

◆ 尾道裏観光

以上が尾道学研究会による「尾道学」の主だった取組みの経過になるが、ここ最近の動向についても触れておきたい。

今年（2017年）5月20日にNHKの人気番組「ブラタモリ」の尾道編が放映されたが、我々尾道学としては、それに先立つ事半年前の平成28（2016）年11月26日に、ブラタモリ尾道編をプレゼンするような形式で、「尾道裏観光」と銘打ったフィールドワーク企画（第45回例会）を実施した（写真38）。

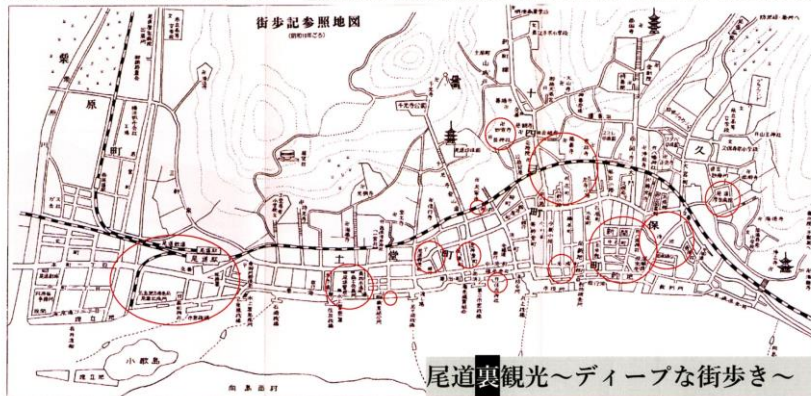
ブラタモリ的なディープな掘り起し、そのアイテムとしての古地図や絵葉書然りは、尾道学としては既に初期の段階からやっている経過もあって、ブラタモリを真似てというよりは、その人気を踏まえて改めて打ち出したといった方が良いだろう。

裏観光の通り、通常の尾道観光では絶対行かない、目を向けられないものばかりを旧市街の内からピックアップし、地元民ですらこんな所にこういうものが、この物にはそういう逸話が秘められていたのか等々、灯台下暗しの再発見連続のツアーとなった。

尾道学でのディープな掘り起しを、筆者はよく「縁の下を覗き込むような感覚」と表現するが、まさに縁の下を覗き込み、時に潜り込んで見るという深みを味わう街歩き企画となったが、初期の頃の企画で定員が50名と膨れ上がり過ぎて大変だった「古地図で歩く尾道町」（2007年3月18日）の企画の時同様に、定員を超える参加者を見る盛況だった。

ブラタモリ人気にも見られるように、歴史通でなくとも、一般の層にもこうした趣向が好まれる、意外に関心あるという事実を改めて実感させられる機会となった。

尾道学研究会第45回例会（フィールドワーク企画） 一般的な歴史・観光散策とは異なる視点や切り口で尾道町内（旧市街）を巡って行きます



日時：2016年11月26日（土）13時より3時間程度の行程＊範囲：西御所駅前～図書館にかけて（平地部分のみ）



定員：20名先着順（要事前申込み）＊参加費：会員無料・会員外は資料代として500円＊少雨決行＊歩きやすい服装でご参加下さい。
申込み・お問い合わせ先：尾道学研究会事務局（080-5612-9108 / dragon-r@sky.hi-ho.ne.jp）

写真（38）「尾道裏観光～ディープな街歩き～」チラシ

◆ 清正公まつり

長江のロープウェイ乗り場の北側、クスノキの良（うしとら）神社に隣接する日蓮宗の妙宣寺（みょうせんじ）の境内に、熊本城で知られる戦国武将・加藤清正を祀るお堂「清正公堂」が建つ。

本堂の真裏の高い位置にある朱色が映えるお堂がそれで、「清正公」と書いて「せいしょうこう」と音読みして呼称する。因みに本家熊本にあつては「せいしょこさん」と呼ばれる。

清正は母親共々熱心な法華経信者で、清正軍が戦場に掲げる軍旗も「南無妙法蓮華経」を記す。その縁から、江戸時代以降に日蓮宗のお寺において、清正を守護神的に祀る「清正公信仰」が広まるが、尾道妙宣寺もその一例である。

一例といってもここで注目されるのは、等身大スケールの像、衣冠束帯（いかんそくたい）の姿でキリリと清正らしく威厳に満ちた顔のお像であるが、こちらが御神体、お寺的に言えば御本尊として安置されているところである。

本家熊本で墓所のある日蓮宗本妙寺（ほんみょうじ）にも、同じく等身大の清正像が「浄地廟（じょうちびょう）」という御霊屋（みたまや）が安置されているが、そちらと兄弟像になるのではないかと目されるほど、何かしら曰く因縁がありそうな存在となっている。

妙宣寺が伝える所では、明治期に地元の豪商がお像を含む清正ゆかりの宝物を入手（購入）し、それを清正公信仰のある妙宣寺へ寄進されたものという。故に直接的に尾道に係するという品物ではない。因みに清正が仕えた太閤豊臣秀吉については、朝鮮出兵の際に尾道へ立ち寄り、豪商に茶の湯でもてなしを受けたとの伝説が残るが、清正についてはそういった話は聞かれない。

尾道の清正公信仰は、妙宣寺の檀家とは別に、信者によって盛り立てられていたようだが、時代の経過と共に忘れ去られてゆき、檀家ですらその存在を知らなくなって来ている状況にあった。そうした中で熊本地震が発生し、熊本城が大きな被害に見舞われてしまう。そこにおいて尾道の清正公を通じて、復興を祈念し、また義捐金をお送りしようと同寺の加藤慈然住職が立ち上がり、筆者を含む有志が集って、清正公堂の祭典として「清正公まつり」を本年（平成 29・2017）年 5 月 13 日に行った。

秘仏と同じ扱いで普段は公開されていないお像が御開帳され、復興祈願の法要が営まれた。これに花を添えるものとして、速水流によるお茶席や歴史講演会、門前市などが開かれ、多くの参詣客を見た。

こちらで寄せられた浄財にお寺からの浄財を加えた 20 万円は、加藤住職ら実行委員会メンバーの手で熊本の西一史市長へ届けられたが、西市長も尾道の清正公に関心を寄せられ、清正が繋ぐ熊本と尾道のご縁に期待を寄せられていた。

妙宣寺での清正公まつりは以後毎年の恒例行事として続けられて行く予定で、来年（平成 30・2018 年）は「ゆかた祭り」とも言われる「山王（さんのう）さん」（東久保町の山脇神社の例祭・山王祭）と同日（5 月第 3 土曜日）で行われる予定になっている。

祇園祭の再活性化例と違って、こちらは全くのゼロからの復興・再生ともいえるもので、改めての敬意を表し、尾道学としても引き続いてこれを支援して行きたい。



写真 (39) 妙宣寺本堂裏手に建つ清正公堂と「清正公まつり」のチラシ

◆ 御調発もう一つの真田伝説

こちらは尾道学が組織的に関わっているものではなく、御調町歴史文化同好会代表の住貞義量氏を軸に、御調と旧尾道にまたがる有志が集ったプロジェクト・チームの編成による取組みである。

昨年（平成28・2016年）のNHK大河ドラマ「真田丸」－ 戦国最後のヒーローといわれる真田幸村が改めてクローズアップされたが、その幸村の息子（長男）に大助という若武者がいた。大坂の陣で父と共に奮戦をするが、最終的には幸村は家康を追い詰める活躍を見せるも自害。大助も秀頼と共に最期を共にしたというのが、現代の我々が認識している歴史の通説である。

しかし、二人は死んではいない、秀頼と共に鹿児島へ落ち延びたという異説も一方ではある。徳川時代以降、豊臣を慕った庶民が、そうであって欲しいという願望から、そうした生存説が流布していったものと解釈しているが、ここでその真相解明をするのが本題ではない。

その生存説の片割れともいえるのが、御調の里山に伝わった、もう一つの真田伝説である。

こちらは幸村ではなく大助が主人公で、秀頼を許して欲しいと鹿児島から江戸の家康のもとへ歎願に向かう道中、身の危険を感じて糸崎から御調方面へ分け入り、徳永村という集落で足を止め、そこで病を得て亡くなった。死の直前に、家康に見せる秀頼生存を示す証拠の品を徳永の何処かへ埋めたと伝わる筋書きである。（『伸びゆく御調』所収「仏縁につながる郷土の伝説」楠務編、中国観光地誌社、1969年／『みつぎのむかしばなし』所収「真田大助ゆかりの石塔」御調町子ども会連合会・御調町教育委員会、1978年）

よくある偉人伝説の一例であるが、ここで目を惹くのが伝説をリアルなものとしてくれる真田姓を名乗る人々の集住であり、その家に伝わった品々には、信州上田城主に始まり幸村の名前も記す家系図や、金箔片が残る槍や刀等が確認されるなど、伝説世界が今に生き続けている事であった。

そうした真田伝説の掘り起しを、単に歴史民俗研究だけに終始するのではなく、これを「まちおこし」にも繋げようと、地元の広島県立御調高等学校の地域活性化授業（御調の五宝）ともコラボレーションして、「スピンオフ真田丸@御調プロジェクト」が立ち上がる事になった。まさに思いもよらぬ番外編である。

具体的には、高校生による「おもてなし武将隊」を参考にした御調真田隊の結成と、真

田大助キャラクターの創造、そしてそれを活かし、また、御調産品ともコラボしてのグッズの企画開発、伝説探訪マップの制作等々、今後の展開に期待が寄せられている。これなどは地域振興・地域活性化へも展開してゆく地域学の好例になるだろう。



写真 (40) 御調発真田伝説発掘の取組みを報じる中国新聞記事 (平成 29 年 5 月 2 日尾三版)

VII まとめ ～地域と住民が舞台上に立つ主役～

以上、尾道における地域学としての「尾道学」について、その経過と具体的な取組みについて概観してみた。そこから見えて来る通り、キーワードとして指摘されるのが「受発信」である。こちらからの掘り起しとその投げかけに対して、大小はあるものの何かしら返って来るものがある、具体的には情報や資料の持寄りであったり、そこから更に派生した展開を見たりという、まさに「打てば響く」反応・反響が見られる事。それこそが尾道学を前進・発展させる大きな原動力であると総括される。

地域学は新たな学問の一つでありながら、学者のみで囲われた世界でなく、普通の市民が主役になり得るという点も大きい。取扱うテーマによって、その分野に精通された専門家をゲストにお迎えする事もあるが、基本的には地域とそこに暮らす住民が主体を成して

いる。

尾道学の事例でいえば、絵葉書を持ち寄る人、絵葉書の年代や被写体の特定をする長老さん、デジタル現像を試みる技術者、尾道鉄道の語り部、茶園遺跡を有する町内会、お祭りを担う人、古文書を読み解く人等々...尾道学という名の舞台の上に立つ演者はその人達であり、筆者はそれをコーディネートする裏方（プロデューサー、ディレクター的な立ち位置）であると認識している。

初めて尾道学を提唱したとされる、荒木正見編著・鈴木右文共著『尾道学と映画フィールドワーク』（中川書店、2003年）では、尾道学について「尾道という言葉で象徴される場所に、言い換えれば、単なる空間としてだけではない尾道を焦点とした広がり」（4頁）を研究するものと述べられ、特に本書では「歩く」に焦点を当てて次のように述べられている（9頁）。すなわち、尾道の捉え方として「第一に、すべてをきめ細かく捉える」「第二に、歴史の流れを漫然と追うのではなく、さまざまな事柄と全体とが絡み合って発展的に進行した動きと捉える」「第三に、全体としての尾道と特定の風景や事柄、人々のすべてがともに大切」という三点を挙げられ、それらの視点をもって「歩く」と述べられているが、もちろんこの「歩く」は、研究室にこもって理論に耽っているのではなく、地域学ならではの様々な実践を企図していることはいうまでもない。これまで述べてきた尾道学研究会の実践の試みはこのような研究の実践的方向性をさらに発展させたものだと言える。

つまり、尾道学にあっては、研究室の中で論じられる地域学ではなく、地域と住民が躍動する地域学であるという事になるだろう。この辺りに、地域学一般の真骨頂があるともいえる。

最後に、尾道学の構築と実践への入口を拓いて下さった地元紙「山陽日日新聞」前社主の秋田清氏、活動を共にして来た天野安治会長以下尾道学研究会会員有志と、その活動に対して暖かく支えて下さっている尾道内外のすべての皆様、当論文執筆のご指導を賜った

尾道学の提唱者である尾道学研究会顧問の荒木正見先生に心より感謝申し上げ、尾道学とその舞台となるわがまち尾道の一層の発展を祈念したい。

【参考文献】

- 山形県生涯学習センターHP「地域学のいざない」 <http://www.gakushubunka.jp/yugakukan/chiikigaku/>
- 山陽日日新聞 平成17年5月31日付1面
- 天野安治監修・林良司編『尾道…セピア色の記憶—絵葉書に見るありし日のオノミチ—』尾道学研究会、2009年
- 林良司編『尾道…セピア色の記憶—過去と現在をゆく今昔散策—』尾道学研究会、2009年
- 天野安治監修・林良司編『尾道…セピア色の記憶—第二章—』尾道学研究会・啓文社、2013年
- 山陽日日新聞 平成21年10月15日付1面
- 前田六二監修・林良司編『タイムスリップ・ルール・オノテツ』尾道学研究会、2011年
- 志賀直哉著「児を盗む話」『志賀直哉全集』第2巻所収、岩波書店、1973年
- 吉田松太郎編著『尾道案内』中国実業遊覧案内社、1915年
- 「園池国朝頼襄遊挹翠園記」荒木審士謬編『文語碎錦』下巻所収、関西図書、1897年
- 国立国会図書館デジタルコレクションHP <http://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/869143/21?tocOpen=1>
- 尾道市立美術館所蔵『賀嵩圖』
- NPO法人尾道空き家再生プロジェクト編『尾道茶園案内帖』同プロジェクト、2017年
- 八幡浩二編著『備後加島園跡—近世町人文化遺跡の基礎的研究—』尾道市立大学地域総合センター、2008年
- 『常称寺祇園略由来』常称寺蔵・尾道市史編さん委員会事務局寄託、1789年
- 楠務編「仏縁につながる郷土の伝説」『伸びゆく御調』所収、中国観光地誌社、1969年
- 「真田大助ゆかりの石塔」『みつぎのむかしばなし』所収、御調町子ども会連合会・御調町教育委員会、1978年
- 中国新聞尾三版 平成29年5月2日付
- 荒木正見編著・鈴木右文共著『尾道学と映画フィールドワーク』中川書店、2003年

[Construction and practices of "Onomichi Gaku" as an example of regional studies.]

[HAYASHI,Ryoji、尾道学研究会前事務局長・尾道市史編さん委員会事務局専門嘱託員]